様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５３２６５

研究課題名（和文）「伝統的な言語文化」の指導における神話教材の開発

研究課題名（英文）A Developmental Study on Teaching Materisls for Myth of "Traditional Language Culture"

研究代表者
小川　雅子（OGAWA, Masako）

山形大学・教育文化学部・教授

研究者番号：４０１９４４５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、神話教材の現代的意義を明確にするために、「世界の神話と比較する視点」・「現代神話を創造する読み」・「言語生活の観点から神話の比喩を読む」という三つの視点を提案した。
　この視点から『古事記』冒頭の話の紙芝居を作成して実演し調査を行った。小・中学生の約割以上が「もっと知りたい」と答えた。発達段階に応じて、受容の仕方に共通点と相違点があった。そこから、神話は、小学校低学年に限定せず、中学生にも有効な教材であることがわかった。
　学習者は、日本の神話から様々な神の概念を得ることができる。本研究は、戦前の神話観から脱却して、学習者の読みを主体とした現代の神話を構築する方向性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The new course of study (language arts) of elementary school have increased reading of myths. However, it is clear that instruction has many problems be- cause there has no reading of myths in postwar language arts education. There-fore, as for how to read myths in language arts education, I insist on the fol- lowing three points. 1. Leaners should read Japanese myths in comparison with world myths. 2. We should creat a new "modern myth" mainly composed of a ques- tion and the imagination of the leaner. 3. The leaner should connect the myths with his experience and read mythical metaphors.
 In this reseach, a study was undertaken in which a mythical picture-story was shown to a group of learners.The effects were later analyzed through a survey. From the survey, the following became clear about reading of myths. Myths are significant for not only the lower grades but also older learners such as junior high students. The learner can get to know various gods from Japanese myths.

研究分野：国語科教育

キーワード：神話教材　古事記　伝統的な言語文化　教材開発　現代神話の創造　国語科教育　紙芝居　教育学

１．研究開始当初の背景

2008（平成 20）年に告示された小学校学習指導要領（国語）に、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された。そして、第１学年及び第２学年の指導事項に「昔話や神話・伝承などの本や文章の読みきかせを聞いたり、発表し合ったりすること。」と、「神話」が明記された。小学校低学年の国語教科書には、「いなばのしろうさぎ」を中心に、「やまたのおろち」や「海さち山さち」等の話がそれぞれ独自な形で紹介されている。

しかし、戦後の国語科教育には、神話をめぐる教材化の議論や実践の積み重ねがほとんどない。そのため、「神話」に対する知識やイメージは個々の教員によって多様である。「神話」というだけで抵抗を感じる教員もいる。授業では他のジャンルとの指導の違いがわからない等、さまざまな指導上の課題もあげられている。また、小学校低学年の指導事項ということで、教材内容にも発展性がみられない。

２．研究の目的

現代の国語科教育における神話教材の位置づけを明確にして、その指導の現代的意義と教材化の可能性を明らかにする。

神話については、「古事記、日本書紀、風土記に描かれたもの……」（『小学校学習指導要領解説国語編』）とある。『古事記』は一つの伝承で構成されているが、『日本書紀』には別伝が列挙されていて一つの伝承というまとまりはない。一般的に記紀神話といわれるが、神野志隆光（1999）は、

> 『古事記』の世界の物語と、『日本書紀』のそれとは、全体として別個なものであり、別な神話というのがふさわしい。

と述べている。さらに、『風土記』は断片的である。そこで、本研究では、『古事記』神話を原典として教材開発に取り組む。

(1)『古事記』神話の受容史・研究史をふまえて、現代における神話の読みの視点を明らかにする。
(2)現代の国語科教育における神話教材の意義と指導の観点を明確にする。
(3)学習者の神話受容の実態を調査して、発達段階に応じた受容の傾向や課題を明らかにする。
(4)学習者の多様性に応じる神話教材を開発する。

３．研究の方法

(1)『古事記』神話の受容史・研究史や、神話の読みをめぐる国語科教育の先行研究を整理して、現代の国語科教育における神話の読みの視点を明らかにする。
(2)『古事記』神話の冒頭から、内容を分かりやすく伝えるための紙芝居を作成する。
(3)小中学生に紙芝居を実演してアンケートを行い、学習者の発達段階による受容の違いについて調査する。
(4)学習者の発達段階に応じた神話教材開発の可能性と課題を明らかにする。

４．研究成果

(1)国語科教育において神話を読む視点として次の３点を明示した。

①世界の神話と比較する視点

記録が残る最古の神話は、紀元前 3000 年頃にまで遡るが、その物語は、それよりずっと昔から言い伝えとして広く流布していた。712（和銅５）年に成立した『古事記』には、世界各地で語り継がれてきた神話と共通の「型」をもつ話が多い。松本直樹(2001)は、次のように述べている。

> スサノヲの大蛇退治はペルセウス・アンドロメダ型神話、イザナギやホヲリ（山幸彦）が「見るな」の禁忌を破る話はメルシナ型神話、イザナギの黄泉の国からの逃走は、呪的逃走譚（呪物投擲逃走譚）と呼ばれる型に属す。ともに世界的な分布を見る。…中略…これらの事例から言えることは、初めから特定の人物が机に向かって、その頭の中だけで、記・紀の「神話」を作りあげたのではない、ということである。…中略…日本神話を講ずる時、諸外国の神話なども資料として示すことが望まれる。

この他にも、『古事記』神話と世界の神話の類似性が多く指摘されている。類似性を検討していくと、日本神話の独自性も見えてくる。

また、物語の違いが、言語の構造と関連している場合もある。ギリシア神話では、ギリシア語の三つの文法上の性別（男性・女性・中性）が、そのまま神話の展開にあらわれている。藤縄謙三(1994)は、

> 宇宙の中の神々は、すべて男性か女性かであるから、相互に恋愛したり結婚したりして、万物が生成する。…略…ギリシア神話の世界は男性または女性の固有名詞の世界であり、自然科学はそれを排除して、中性名詞を中心に据える。

と指摘している。

これに対して、男性名詞・女性名詞等の区別がない日本語の神話では、最初に登場する神々は「独神」である。「独神」の意味は、「対立でない存在」・「男女対偶の神に対して単独の神」・「男女という性をもたない神」等と解釈されている。しかも「隠身」で姿が見えず、恋愛や結婚とは関係なしに「成る」神である。このように、

ギリシア語と日本語の構造の違いは神話世界にも反映されている。

吉田敦彦(2008)は、農業の始まりを説明した神話について、つぎのように述べている。

> 『旧約聖書』には、「善と悪を知る木」の実を食べてしまったあとでは、アダムとエバが、大人の生き方をせねばならなくなったことが語られている。それと人間と神との違いはありますが同様に、スサノヲもやはりオホゲツヒメを殺したあとでは、一転して子どものようであることをやめたのです。

スサノヲが殺したオホゲツヒメの頭から蚕が、目に稲種、耳に粟、鼻に小豆、陰に麦、尻に大豆が生り、カミムスヒがこれを種とした話は、世界の神話との類似性が指摘されているが、吉田は、これを契機とした神や人の変容に着目している。すなわち、食物の種を得てからは、神も人も耕す生き方、労して紡ぐ生き方をするようになったことを、「子どものようであることをやめた」と表現している。主体的な創造活動を行う神も人も成長していくという共通性を認めている。

さらに吉田は、そのような共通性を指摘する一方で、『旧約聖書』や『ギリシア神話』における労働観は神から人間に対して課されている刑罰であるのに対して、日本神話における労働観はそれとは全く異なっていることを指摘している。

このように世界神話と比較してみると、類似性や違いは単純ではない。物語の切り取り方や解釈の観点によって、多様な異同がみえてくる。

したがって、世界の神話との比較という視点から日本神話を読むことは、日本の伝統的な言語文化を知るだけでなく、グローバルな視野に立って人類の祖先のものの見方・考え方を共有することになる。それは、日本と異なる文化の源泉を理解することにもつながる。したがって、現代の国語科教育における神話教材の開発は、このように世界の神話と比較して読む視点をもつことが重要である。

②「現代神話」を創造する読み

1970 年代以降、中世の『日本書紀』注釈学は、「注釈」というスタイルをとりながら、『日本書紀』の神話世界を読み替え、作り替えて、中世独自な新しい神話を作りだしていく創造運動であったと再評価されるようになった。斎藤英喜（2012）は、これをふまえて、本居宣長の『古事記伝』について、次のように述べている。

> それは徳川社会に固有な、新しい神話の創造であったといえるのではないか。宣長の『古事記伝』を、中世神話に倣って「近世神話」と呼ぼう。…中略…『古事記』はけっして受動的に受容されてきたのではない。

筆者は、この観点から、現代の国語科教材としての神話は、戦前に教材化された時代とは異なる視点から「現代神話」の創造をめざすものでなければならないと考える。

佐佐木隆(2007)は、平安時代以降の説話集に見える話と、神話・伝説との間には、大きく異なる点があるとして、次のように述べている。

> 後世の説話は、概してその成立時に仏典や漢籍に反映する外来思想から影響を受けており、（中略）「然れば……まじきなりとぞ言ひ伝へける」というような教訓的な文句が説話の末尾に置かれていることもあるし、仏教説話集に収めてある説話でなくても、「然れば、みな前世の報と知るべきなり」というような仏教色の強い文句で結ばれていることもある。説話の成立そのものに仏教思想や中国思想が直接にからんでいることが多いのである。これに対して、より古い神話・伝説の場合は、そのような思想的なまとめの文句が末尾に付されていることはまずない。どの神がどのようなことをしたとか、どの天皇の代にどういうことがあったかと語るだけであるのが、普通なのである。

教訓的な文言がないからこそ、それぞれの時代の価値観に応じた多様な読み取りが可能である。学習者の疑問や想像を主体として解釈することは、新たな「現代神話」の創造となる。

③言語生活と関連させて神話の比喩を読む

教訓的文言がないという神話の特徴を生かすことに着目すれば、神話は時代に応じて多様な解釈が可能である。

山本典人（1969）は『うみをわたったしろうさぎ』と『おおくにぬしのぼうけん』を読み聞かせした後の子どもたちの感想について次のように述べている。

> 読み終えたあとの子どもたちの感想は
> ○おおくにぬしは、心やさしいが力もちだとおもいます。
> ○おおくにぬしは、勇気があってつよい人だとおもいます。
> ○おおくにぬしは勇ましくてチエ者です。
> など声をそろえてほめたたえたものばかりでした。子どもたちがあまりにもほめそやすので、わたしはちょっと気がかりになりました。この話をそのまま子どもたちに与えると、不死身にたたかったおおくにぬしさ

え文句なしに国土を献上したのだから、高天原の神々=天皇家の先祖はさぞかしすばらしい神々であったにちがいないという印象を与えてしまうことになりかねません。つまり高天原神話の絶対性をうえつけ、日本の国は天皇の祖先によってはじめられたというゆがめられた国家観をもたせることになります。しかも、白うさぎやおおくにぬしの印象が強ければ強いほど、この危険性は大きいわけです。

以上は山本の解釈であるが、個人の言語生活と関連させる視点で読むと、それとは異なる次のような解釈が成立する。

『古事記』では、オオクニヌシノミコトは、スサノオノミコトと並んで、年をとり成長していく神として特異な存在である。うさぎを助けた心やさしいオオクニヌシノミコトは、嫉妬深い異母兄弟に殺されてしまうが、母親の切実な願いが聞き届けられて、生き返る。その後も様々な苦難に遭うがスセリビメに助けられ、たくましい青年に成長する。さらに、葦原の中つ国を実り豊かな国にしたところで、国土返上を迫られる。すると、オオクニヌシノミコトは、自分のために壮大な宮殿を造ってくれれば隠れ鎮まると述べて、全てを返上する。

この話を言語生活の観点から解釈すれば、成長するオオクニヌシノミコトは人間の生涯をあらわし、国土返上は人間の「死」を象徴していると読むことができる。人は現象世界でどのように素晴らしい仕事を為しても、寿命がくればすべてを置いて死ぬ。それが国土返上の物語として描かれていると解釈できる。

以上の３点を、現代の国語科において神話を読む新たな観点とする。

(2)神話の内容をわかりやすく伝える紙芝居を作成した。

絵：菊池　郁子
文：小川　雅子
第一部　神々の誕生と国生みの話
第二部　「うけい」と「天の石屋戸」
第三部　「須佐之男命」と「八岐大蛇」

内容のまとまりと実演時間から、１作品の長さを決め、小学校低学年でも理解できるように､絵の枚数や構図を考えた。

文章はできるだけ日常で使う分かりやすい言葉を選び、キーワードを取り出して、言葉だけの画面を作った。文章には言語生活に関連する解釈を加えた。

(3)小学生・中学生・大学生に紙芝居を、以下の手順で実演した。

①紙芝居が『古事記』に書かれている神話であることを告げる。
②『古事記』真福寺本を見せて、原本が漢字だけで書かれていて、句読点も段落も無いことを指摘する。
③『古事記伝』を著した本居宣長の仕事を紹介する。
④実演中は、物語に出てくる古語についての説明を適宜加える。
⑤わかりにくい言葉は、ひらがなで書いたものを黒板に貼る。「いざなぎのみこと」・「いざなみのみこと」・「よみのくに」

(4)小学生･中学生・大学生に第一部の紙芝居を実演後アンケート調査を行った。

①実演の時間は２０分。アンケート記入は２０分（小学２年生のみ２５分）。
②調査対象者
小学生　３８３名（２～６年生）
中学生　１８８名（１・２年生）
参考：大学生　９６名（１年生）
③質問事項
・この話を知っていましたか。
知っていた・少し知っていた・知らなかった
・このような神話はすきですか。
すき・ふつう・きらい
・神話についてもっと知りたいですか。
もっと知りたい・どちらでもない・知りたいと思わない
・「よかった・おもしろかった・感動した」などと思ったことを書いてください。
・「むずかしかったところや疑問に思ったこと」などについて書いてください。
・このお話の続きを想像して書いてください。

(5)以上の調査結果から、発達段階による神話の受容傾向が明らかになった。結果の一部を小川雅子（2015）がまとめた報告書の中から抜粋する。

①小学生の 80%・中学生の 66%・（大学生の 34%）以上が冒頭の話を知らなかった。大学生で「少し知っている」と答えた者の多くは、漫画・ゲームによる知識だった。
②神話についてもっと知りたいと答えたのは、小学生で 88%・中学生で 76%（大学生で 74%）以上だった。年齢に関係なく神話に対する興味は高いことがわかった。
③「面白い」・「驚いた」・「すごい」等の心情的な感想や現実的な発想からの疑問は、小学２年生から大学生まで共通していた。

例えば、「神が大勢いること」・「イザナキとイザナミが国生みで失敗を重ねたこと」･「イザナミが死んだこと」・「黄泉の国の様子」・「イザナキが追いかけられたこと」・「桃の実三つで

雷神が逃げたこと」・「事戸を渡したこと」等について、小学２年生が書いた驚きや疑問、共感等は各学年にも、大学生にも共通して書かれていた。

④発達段階によって異なる読み。

小学校低学年では話の一部や紙芝居の絵を手がかりとした内容理解についての感想が多かった。

中学年では既知の昔話や外国の神話と関連させた解釈をしていた。外国の神話を読みたいという意見も中学年から出てきている。

高学年では自分の生活と結びつけて解釈したり、古代人のものの見方・考え方について考えたりした感想が多くなった。

中学生では、神話の比喩を解釈しようとしたり、古語に関する興味を述べたり、神の概念や世界観について述べた感想が多かった。疑問点には古事記研究の課題につながるものもあった。

大学生では、神話の比喩の解釈から文化的な意味づけ等の感想が多かった。

低・中学年の学習者が「面白い」と書いている長い「神名」について、高学年以上では「難しい」、「覚えられない」という感想が多くなっていた。実演の際に「覚えるように」とは言っていない。高学年以上になると、内容を記憶し比喩を解釈しようとする受容態度が確立していくことがうかがわれた。

⑤学習者の多くは完全無欠で万能な唯一神を思い描いていたので、古代人が創造した神の概念は大きな驚きであったようである。

「神様も失敗するのか」、「死ぬのか」、「泣くのか」、「逃げるのか」等という驚きの感想が多い。「神様も大変だったのだと感じた」という感想も多く、学習者は神のイメージや話の展開の意外性に驚いていることがわかった。

⑥紙芝居は神話の理解を助け、学習者に応じて必要な情報を加減することができ、その画面には内容を強く印象づける効果があった。

⑦神話に対しては年齢に関係なく興味を持っているので、小学校低学年に限らず、学習者の発達段階に応じた多様な教材開発が可能であることがわかった。

⑧学習者は日本神話よりもギリシア神話の話を知っていたので、中学年以上になると世界の神話と比較して読む学習活動が抵抗なく行われることが予想される。

現代の国語科教育において神話を読む視点として、「世界の神話と比較する視点」・「現代神話を創造する視点」・「言語生活と関連させて神話の比喩を読む視点」をあげた。調査結果から、現代の学習者にはこれらの視点からの読みが可能であることが明らかになった。

また、本研究で作った紙芝居を、平成 25 年９月に実演したＡ小学校では、それを見た５年生が 11 月の学習発表会で神話劇をしたいと言い、図書室の『古事記』から自分たちで台本を書き衣裳や舞台装置を作った。その劇では、筆者が紙芝居で省略した部分も実演されており、学習者の受容の実態は筆者の予想を超えていたことを認識した。

今後は、小学校低学年の「内容」に限定することなく、教材化について具体的に明らかにしたい。

引用文献

・小川雅子（2015）『「伝統的な言語文化」の指導における神話教材の開発』研究成果報告書 pp.23-30
・神野志隆光（1999）『古事記と日本書紀』講談社 p.136
・斎藤英喜(2012)『古事記はいかによまれてきたか』吉川弘文館 pp.10-11
・藤縄謙三（1994）『ギリシア神話の世界観』新潮社 pp.27-29
・松本直樹（2001）神話教材の可能性を考える－神話研究者の立場から－．早稲田大学国語教育研究，21，60-67
・山本典人(1969)「神話と授業」直木孝次郎･徳武敏夫･吉村徳蔵･本多公栄･山本典人･岩本努著『神話と教育』新日本新書 pp.153-155
・吉田敦彦（2008）『日本の神話』青土社 pp.20-21

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

１．小川雅子，古典の指導に必要な“学習用語”と活用のポイント，教育科学国語教育，査読無，2015，pp.32-33

２．小川雅子，伝統的な言語文化の教材研究，大学と附属学校園の共同研究報告書，査読無，2014，pp.8

３．小川雅子，学習者の自他意識を豊かにする言語活動，月刊国語教育研究，査読無，439 号，2013，pp.4-9

〔学会発表〕（計１件）

１．小川雅子，神話教材の開発について－学習者の発達段階による解釈の違いに着目して－，全国大学国語教育学会,2014.11.9.筑波大学,（第 127 回筑波大会研究発表要旨集 pp.241-244）

〔その他〕
１．研究成果報告書
　小川雅子（2015）『「伝統的な言語文化」の指導における神話教材の開発』研究成果報告書,全 56 頁
２．紙芝居３部
　小川雅子（2015），菊地郁子
①神々の誕生と国生みの話　１８枚
②「うけい」と「天の石屋戸」１７枚
③「須佐之男命」と「八岐大蛇」１７枚

６．研究組織
(1)研究代表者
小川　雅子（OGAWA　MASAKO）
山形大学　地域教育文化学部　教授
研究者番号：40194451